学校訪問

各種テストの活用と学びの質を高める教育実践の取組み

―五泉市立村松小・長岡市立南中―

編集部

各種テストの活用は、学校全体の教育の中でどのような位置をしめ、こどもの「学びの質」にどのように関わっているか、「学びの質」は子どもの主体的・自律的な学習をどう促しているかを知るため、「学び合い」を重視して取り組んでいる県内の小学校と中学校を取材した。

編集部

五泉市立村松小学校　佐藤元彦校長に聞く

問1　現在、県教育委員会が実施しているＷｅｂ配信問題について、どのように取り組まれていますか。

Ｗｅｂ配信問題をすることで、子どもの対応力を伸ばす事が出来る。週に2回、朝学習の時間に取り組ませている。また、家庭学習の課題として、補充問題のプリントに取り組ませることもある。県教委から結果の分析・改善の方策が提示されるので、ありがたい。

問2　どのような経過で「学び合い」のある授業づくりに取り組むことになったのでしょうか。児童の学校生活の実態や地域の要望など、その動機についてお聞かせ下さい。

当校では「学び合う子」が教育目標の一つになっている。佐藤学（学習院大学教授）さんの学びあいを始めて4年目になる。それ以前には、西川純（上越教育大学教職大学院教授）さんから指導を受けたこともある。

私が赴任した時、「学び合う授業」作りの理念が先生方によく理解されているなと感じられた。

私はこれからの子どもたちに、「社会に出て生活するのに必要な力を付ける」ことが重要だと考えている。その点で、協同的に学び、人間関係のあり方をも学ぶことが必要だと考えている。

問3　この授業づくりの研究をすすめるための目標、組織、研究方法、予算等についてお聞かせ下さい。複数年の取り組みではその年度毎にお聞かせ下さい。

学校経営方針の中に、

・どんな子どもにも対応できる教師力の向上

・教師主導の学習指導から子どもの力を活かした教育活動

・学年力向上と教師同士の得意分野や学びの共有

・子どもの良さや成長を保護者や地域と実感、共有

を掲げ職員に共通に理解してもらいたいことを示した。

また、過去の3年間は、「ともに学び合う授業の創造」を目指し、個人のテーマで、様々な教科で授業研究を進めてきた。今年度は、教科を「国語・算数」に絞って研究することにした。

学年会は、週一回確保、理解が十分でないところを重点単元に設定し、研究授業前に教材研究会を実施している。

教育委員会の指導主事や外部からの指導者から、様々な支援をしてもらっている。また、先進的に研究を進めている学校の実践を参考にしている。

問4　とりわけ「学び合い」の授業は、「学びの質」と関わって以前の授業と違う特徴的な点はどのようなことでしょうか。

一斉授業で教師の言った言葉は、全ての子どもに伝わっているとは限らない。子どもたち同士の話し合いによって、理解が深まっている。

アメリカの「ラーニングピラミッド」説〈注1〉に、記憶率では、「講義を受ける・・・5％」に対して「他者に教える・・・90％」と指摘されている。

グループなどの協同的な作業で、子ども同士の関わりができ、学びの支え合い、深まり、人間関係の成長を実現することが出来る。学びの協同を積み重ねることによって、相手を思う気持ちが育ち、いじめが少な

くなったりすることも期待できる。

問5　また、この取り組みをすすめるにあたって、教員の意思統一や研究体制、教材研究等はどのようにすすめられましたか。

学び合いを授業に取り入れるためには、日頃の積み重ねが必要だ。児童は学年・学級が替わるし、職員の構成も変わる。教師の対応の仕方がしっかりしていないと、定着しない。そのため、年度初めの会議では、共通理解を図る。知育推進委員による研究の推移等の説明や、ビデオによる授業の進め方の紹介がなされる。経験のあるなしなども配慮して学年部の担任構成を工夫している。最初はイメージできなかった転入職員も、方向性を見いだし、他の職員と協同して研究を進めている。

問6　このような取り組みによって、取り組む以前の子どもたちと比べ、授業に臨む態度や学力などにどのような変化が生まれましたか。教師・保護者・地域の反応についてもお聞かせ下さい。

保護者会やたよりで「学び合い」の取り組みを伝えてきた。保護者には、当校がこの取り組みで努力していることが認識されている。継続的な取り組みによって、学ぶ質の向上や、学力の向上が見られたが、一層の努力が必要だ。先進校の取り組みを参考にして今後とも進めていきたい。

問7　今後この取り組みにあたって残された課題をお聞かせ下さい。

「全般的な学力の向上」「しっとりとした雰囲気の学級作り」「子どもの学び合いを質の高いものにしていくこと」が課題だ。人と関係する機会が減っている時代に育つ子どもたちの現状、個性ある子への対応、学び方の工夫が求め続けられる中で、子どもの力を活用しながら取り組みを続けていきたい。

〈注1〉エドガー・デールが、その著書（『学習指導における聴視覚的方法』１９４６）で提唱した学習経験の分類図、「経験の円錐」が元である。抽象なものから具体的な次元に沿って「経験」を十一の段階に分類した。「学習」は「経験」の一般化にあると定義して、そのためにはもっとも直接的で具体的な経験から、さまざまな

抽象化の段階を経て、最後にもっとも抽象的な言語象徴つまり概念化に至ることを説いた。エドガー・デールは、米国、オハイオ州立大学教育学教授。提示されている数字（％）は、示された活動方法や教え方の後に情報を「記憶している割合」の平均を示している。平均学習定着率から見ると、講義は５％の影響しかない、さまざまな教授方略、教授方術を工夫することが学習定着率を上げる、としている。特に学生同士が教え合うことは、非常に有効な教授方略と言える。授業内で学生同士が教え合ったり、話し合ったりする仕組みを取り入れると、学習へのモチベーションが上がったり、学習定着率が上がったりする、などと述べている。

長岡市立南中学校
長谷川浩司校長に聞く

問１　現在、県教育委員会が実施しているＷｅｂ配信問題について、どのように取り組まれていますか。

国語、数学、英語全てのＷｅｂ配信問題を実施している。さらに、授業中に補充問題を実施したり、週末の課題としてサポート問題を持たせたりしている。最低限身に付ける事の意識付け、県と自校との比較、経年の推移を見ることに役立っている。学年の目標として、対県比で百十％である。

問２　どのような経過で「学び合い」のある授業づくりに取り組むことになったのでしょうか。児童の学校生活の実態や地域の要望など、その動機についてお聞かせ下さい。

当校では、平成十八年度から自分らしさを大切にできる生徒の育成の一環として「学び合いのある授業」の具現を目指して研究に取り組んでいる。説明一辺倒では力が付かない。子ども同士の学び合いは理解を深め、定着に有効だと考えたことが出発点。

学び合いのモデルの運用と言語活動の充実のため様々の手立てを取っている。年二回の学習アンケート（七月、十二月実施）をとり、手立ての有効性や今後工夫しなければならないことを明らかにしている。

問３　この授業づくりの研究をすすめるための目標、組織、研究方法、予算等についてお聞かせ下さい。複数年の取り組みではその年度毎にお聞かせ下さい。

今年度は4年次の取組。習得・活用を意図したカリキュラムの有効性の検証、学び合いのモデルの運用と言語活動の充実、言語活動を充実させる枠組みの確立を図るために、個人研究、教科部研究を進めた。「一人一実践」の取り組みや、外部指導者を招いての校内一斉授業研究会・一教科一実践を実施した。外部講師としては、教育委員会の指導主事や、研究実績の豊富な方々を招いた。大学や新潟教育研究所からも講師派遣を受けた。

問4　とりわけ「学び合い」の授業は、学びの質と関わって以前の授業と違う特徴的な点はどのようなことでしょうか。

問題解決的な学習に取り組むことで

①自分の考えを述べる。

②他者と自分との位置関係が分かる。

③述べられた考えに対する賛同・論駁がある。

④間違いを修正しながら理解が深まる。

⑤振り返りがある。

がなされ、学習への参加意欲が高まると共に、学習の効果が期待できる。

問5　また、この取り組みをすすめるにあたって、教員の意思統一や研究体制、教材研究等はどのようにすすめられましたか。

四月、異動してきた教職員に対して当校の取組を説明している。学年や教科のスタッフを考慮して、研究推進部・全体研・グループ研の推進組織を作って研究を進めた。授業展開のモデル、学び合いの授業計画を出してもらい、実践を積み重ねた。また、九月に校内一斉授業研究会を計画し、公開授業・ミニ講演・協議会を実施した。その運営は三つのグループを編成してグループ長が中心になって行った。長岡市内の中学校、南中学校区の小学校にも案内して授業を公開した。

県・市研修センターの講座参加を奨励した。また、研究の成果について「長岡市教育研究論文」への応募や、校内研修誌『南研』のまとめにつなげている。

問6　このような取り組みによって、取り組む以前の子どもたちと比べ、授業に臨む態度や学力などにどのような変化が生まれましたか。教師・保護者・地域の反応についてもお聞かせ下さい。

学習アンケートの集計結果について、平成二十二年

度と平成二十五年度を比較してみると

「考えを持つ」……81％→87％

「意見を述べる」……67％→80％

「コミュニケーション活動を行う」…81％→89％

などから、「学びの質」が高まっていることが分かる。

また、全国学力学習状況調査から「国語・数学とも、B問題の成績が高い。」こと、さらに、全国学力テストから「国語・英語の『書く力』が高い」ことが分かった。日頃の授業実践の成果が出ている。

南中では、総合的な学習として、

一年生……「学年旗樹立式」「三傑劇」

二年生……「笹ヶ峰キャンプ」「平和学習」

三年生……「生き方を学ぶ」「職場体験学習」

に取り組んでいる。〈注1〉

これらの様々な活動の中に「書く」ことが位置付けられ、その結果、文章表現力が鍛えられているのではないか。

保護者には、研究の様子や学力テストの結果について、学校だよりなどで知らせている。また、総合的な学習の時間の発表会に参加してもらったり、文集としてまとめた物を読んでもらったりしている。

数年間の学校教育の取組について教科や領域毎にまとめて、『南中の教育』として発行している。

問7　今後この取り組みにあたって残された課題をお聞かせ下さい。

①学び合いのモデル図が一人一人の教師に定着するように授業計画を実践すること。

②言語活動と学び合いのモデルを明確にしたカリキュラムを作成すること。

〈注1〉上段に記載されたものは学年単元で、「学年目標や学年生徒への願い、学年行事との関連を取り入れた、学年のテーマによる学習」。下段に記載されたものは地域単元で、

一年生「長岡の先人から学ぶ」

ねらい・・・先人の偉業を調べ、先人の苦労や努力、理想の思いに触れ、生き方を学ぶ。長岡の三傑・・・河井継之助、小林虎三郎、三島億二郎。

二年生「長岡に生きる人から学ぶ」

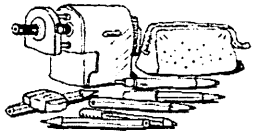
ねらい・・・現在長岡で働いている人の姿から、長岡や長岡に住む人々のよさを見つけ、自己の生き方を考え

る。長岡空襲の悲惨さや戦災からの復興の様子を体験的に学び、「平和とは何か」について追求する。広島への修学旅行との関連・比較学習を通し、広い視野から平和学習を深める。

三年生「よりよい郷土のために自分ができること」

ねらい・・・よりよい地域（長岡）をつくるため、自分は何ができるかを考え、その中からできることを実践する。その実践を通して、今後の自己の生き方や地域へのはたらきかけを学ぶ。学習の結果を自己の生き方に関わらせて、文章でまとめる。冊子を作る。

（文責・こひがし よしお・所員）



学校　あの不思議な場所（その2）

（23ページのつづき）

長い詩の後半部分は、以下のようになっている。錯覚かもしれないが、その「なにか」を教えてくれたような気がした。

「〝ぼくたちよりずっと若いひと達たちが　なにに妨げられることもなく
すきな勉強をできるのはいいなァ　ほんとにいいなァ〟
満天の星を眺めながら　脈絡もなくおない年の友人がふっと呟く

学校　あの不思議な場所　校門をくぐりながら
蛇蝎のごとく嫌ったところ
飛びたつと　森のようになつかしいところ
今日もあまたの小さな森で　水仙のような友情が
生れ匂ったりしているだろう
新しい葡萄酒のように　なにかがごちゃまぜに醗
酵したりしているだろう
飛びたつ者たち　自由の小鳥になれ　自由の猛
禽になれ」

（小野塚）